

徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

178号

平成29. 12. 20

60人出席 盛大に記念祝賀会

2017. 10. 9
阿波観光ホテル

徳島ペンクラブ（竹内菊世会長、140人）は、秋晴れに恵まれた10月9日、J.R徳島駅前の阿波観光ホテルで、創立50周年記念祝賀会を開いた。1967（昭和42）年11月に産声をあげて今年で丁度半世紀。会場には、県内の関係団体・個人からお招きした来賓10人、会員50人が出席、3時間余にわたって盛大に50周年を寿いだ。

祝賀会は11時30分、鈴木綾子副会長の司会で開会。竹内会長が「この記念すべき年に居合わせた幸運を、皆さまとともに

に祝いたい」（詳細は別掲）とあいさつ。この後、来賓の祝辞、紹介と続いた。祝辞では、知事、徳島市長（いずれも代理）に続いて、ご出席の美馬持仁県教育長、富永正志文学書道館館長から丁寧な激励のお言葉をいただいた。

続いて、感謝状、功労賞の贈呈があり、竹内会長から徳島県教育印刷(株)と同社社長の宮田博史氏にそれぞれ感謝状、ペンクラブ参与の上野隆、木村喜美子のお二人（木村さんは所要のため欠席）に功労賞を、それぞれ花束を添えて贈った。宮田、上野両氏から謝辞を頂戴、「青年座」による寿二人三番叟の祝舞があつてセレモニーは終了。

徳島ペンクラブ



冒頭あいさつするペンクラブ竹内菊世会長



徳島県教育印刷(株)社長
宮田博史氏に感謝状



知事代理
福井廣祐氏が祝辞

この後、小休を挟んで、県民環境部次長・板東俊夫氏の音頭で乾杯し、祝宴に移った。宴の所々では正木孝枝さんのワンマン・フラダンス・ショーを始め、丁山俊彦、松田一美、上窪青樹の会員がそれぞれ自慢の芸を披露して、会場は大いに盛り上がった。午後3時、西池冬扇副会長の一本締めでお開き。

徳島ペンクラブが発足したのは、当然ながら今から50年前の昭和42年。貴志山治の「暖流」、悦田貴和男の「四国文学」、田中富雄の「徳島作家」など、県内の主だった文芸同人誌の有志が集まって、何か横のつながりがほしい、文学談義をする場がほしいと、話し合ったのがきっかけだったようです。ほどなくして、昭和42年11月に、同志61人で発足し協議の末、「徳島ペンクラブ」と名付けられました。それから半世紀を経た今日、「四国文学」も、「暖流」も、「徳島作家」もなくなってしまうかもしれません。徳島ペンクラブは、50年の歴史を積み重ね、会員140人余を有する立派な文芸団体に成長し、堂々と活動を続けています。この間、生みの苦しみ、経営の苦しみ、継続の苦しみと、困難なことがたるとともに、この記念すべき年に居合わせた幸運を、皆さまとともに祝いたいと思います。

記念の年に居合わせた 幸運を祝いましょう！

竹内会長あいさつ

これから先も、先輩方の熱い思いを踏襲し、文芸の発展と共に、我が徳島ペンクラブが無事に堂々と継続してまいりますことを願って、あいさつと致します。本日ご参加下さいました会場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

くさんあったと思いますが、それらを上回る楽しさ、喜びがあり、その意義を感じたからこそ続いたのだと思います。文化とか文芸とかは、厳しい時代には真っ先に切り捨てられる分野ですが、今、このように、50周年を祝うことが出来る時代であることに、大いに感謝



来賓の美馬持仁県教育長(左端)らが囲む主賓テーブル



舞台上に勢ぞろいし、「月光仮面」の歌をうたってフィナーレ



“戦い” すんでスタッフで記念撮影



花束を受ける功労賞の上野隆参与



中締めであいさつする西池冬扇副会長



ハワイ(?)から駆けつけ、フラダンスを披露する正木孝枝さん



「おひとつどうぞ」。先輩会員にビールを勧める新人の多田洋子さんⓂ

県民文化祭協賛

50周年記念展覧会開く

最終日「とくしま物語50」を朗読

10月20～22日
文学書道館

県民文化祭協賛の徳島ペンクラブ50周年記念展覧会が10月20日（金）から22日（日）までの3日間、県立文学書道館で開催された。ペンクラブ半世紀の歩みが分かるパネル

展示のほか、最終日には県外著名人から寄せられたメッセージの会員による朗読会もあった。

県内35の文学碑も写真入り紹介

会場となったギャラリーには、正面の壁面に50年の活動の歴史が一目で分



作家・佃実夫夫人の陽子さん(87)が横浜市から駆けつけ、あいさつ



早稲田大学教授・鳥羽耕史氏の文を読む藤原真智子さん



徳島県人会 全国連合会会長・木内公氏の文を朗読する山形靖子さん



ペンクラブ会員の朗読を熱心に聞く客席



県内35の文学碑を写真入りでパネル展示



多忙な公務の中、駆けつけてくれた飯泉知事

かるパネル展示。左右の壁面には「選集」35号で紹介した県内35の文学碑を写真入りで大きく展示、さらに左右のフロアには、これも選集の「とくしま物語50」への県内外著名人からのメッセージ50点が、生原稿で展示され、訪れた文学ファンの目を奪っていた。このほか、客席背後には知事、県教育長、徳島新聞社理事会長の「祝辞」がそれぞれパネル展示され、さらに「選集」のバックナンバーも、自由に閲覧できるよう工夫されていた。会場の一角では、

徳島ペンクラブは今年50周年を迎えました。それを記念して、県内外の著名な方、50人からメッセージをいただきました。この内、県外にお住みの徳島県

朗読会・会長あいさつ

要旨

徳島ペンクラブは今年50周年を迎えました。それを記念して、県内外の著名な方、50人からメッセージをいただきました。この内、県外にお住みの徳島県

ペンクラブの活動など記録した映像もスクリーンに流された。最終日の朗読会は、午前と午後の2回、竹内会長のあいさつ（別項）に続き、会員22人が、25人のメッセージを声高らかに朗読した。閉会まじかになって飯泉知事が駆けつけてくれ、熱心に展示を見ていただいた。会期を通し台風の影響で、荒天となり、客足は伸びなかったが、展示は50周年にふさわしい内容。一カ所だけでは惜しいという声が出て、来春4月から6月にかけて、県内5カ所程度で巡回展示をする計画が浮上している。

第18回とくしま随筆大賞授賞式

大賞・準大賞作品を朗読

阿波観光
ホテル

第18回とくしま随筆大賞（徳島ペンクラブ主催）の授賞式は、10月9日（月・祝）午前、阿波観光ホテルであり、受賞者ら関係者25人が出席。竹内会長が受賞者にお祝いの言葉を述べ、一人ひとりに

賞状と記念品を授与した。続いて、西池副会長が選考経過を報告、審査委員の柏木康浩・徳島新聞生活文化部次長が講評した。

この後、コーヒーとケーキをいただきながら、ペンクラブ会員の岡本



大賞受賞の佐倉順さん（中央）ら
入賞者と関係者で記念撮影



大賞作品「光つないで」を朗読する
岡本信子会員

信子さんが、大賞受賞の「光つないで」（佐倉順・作）、同じく山崎純世さんが、準大賞の「眉山のささやきから百五十日」（大本泉・作）をそれぞれ朗読。和やかなうちに散会となった。

大賞受賞の佐倉順さん（本名・川田順子）海部郡海陽町）は式の後、喜びを次のように話してくれた。「素敵な賞をいただきありがとうございます。この年齢の私にしか書けないこと、今の自分だから書けることを見つけ、今まで以上に丁寧に、文章を書くように努力したいと思います。ありがとうございました」今回は、57編の応募があり、最終審査に残った11編について、依岡隆児（徳島大学教授）、柏木康浩、竹内菊世の3審査員による合議で授賞作品を決定した（詳細は、ペンクラブ選集35号に掲載済み）

子規・漱石 生誕 150年の愛媛へ

住友 京子
(今比古)

徳島ペンクラブ主催

秋の文学旅行

快晴を喜びペンクラブの一行四十人は愛媛へ向けて一路西へ。阿波観光バス一台を埋める熟女と年配男性。七十歳以前と七十、八十歳代がそれぞれ三分の一ずつの分かりやすい年齢構成と参加者を紹介した笑顔の竹内菊世会長。バスのその場所に一度は立って見たかったとの感慨もふさわしい見事な立ち姿。快調な出足で吉野川を遡り、初めてのトイレ休憩は吉野川サービスエリア。

竜田姫美濃田の淵へ尿さるる

さて車内では「子規のこぼれ話」と題して上窪青樹さんから数々のエピソードが紹介された。なかでも幼少時の子規は母方の祖父大原観山に漢詩の手ほどきを受けるなど恵まれた言語環境にあったこ



と。後に実際に子規記念館にて、

一声孤月の下

啼血聞くに堪へず

半夜空しく枕をそばだつ

古郷万里の雲

を見、彼の短く激しい呻吟しんぎんの三十余年の生涯を、もう既に予見したかの十一歳の達観に言葉がなかった。

早熟は早逝のため子規と秋ゆく

次に夏目漱石を鈴木綾子さんが膨大な彼の書簡にスポットを当て披露してくださいました。肉筆の書面とふんだんな写真で漱石がグンと身近に。第一子を

もうけた頃に文部省派遣でロンドン留学。滞在中に購入し読破した英字書物は四百冊とも六百冊とも。思うに任せぬ毎日に疲れ、鏡子夫人に「会いたい」旨の肉声をしたためている。まさしくロンドンの霧のような重い日々だったのだ。錦秋の中行くバスに座しながらあたかも、子規と漱石と濃密に旅したかの錯覚さえおぼえた。最初に松山市内の子規記念館を訪れた後、午後は愛媛の県魚である鯛ちそうのご馳走。のちの腹ごなしよろしくとべ動物園へ。無柵放養式の十一ヘクタールの園内各所では様々の動物が晩秋の表情としぐさで我々を迎えてくれた。

器量良いカワウソの顎あご日の溜り

隠居するヒビの肩口秋の声

毬二つ遊び道具にアシカ吼ゆ

赤毛の子レッサーパーパンダは放浪癖

ロバの目の笑っているか紅葉山

猿山のサル弄ぶ銀チェーン

水牛のふりむきぎまの眼に白雲



昼食の開花亭横にある詩人・坂村真民の碑の前で



生家の一軒隣は仕舞屋で、子供の頃年下の修ちゃんやみっちゃんときよく遊んだものだった。折り目正しい母御は季節の野菜を欠かすことなく作っておられる静かな家庭であった。

そのお隣は葉屋で町内会長宅。作業場兼座敷で型板に合わせて折る脱脂綿のたたみ方を喜々として邪魔がられずに手伝わせていただいた。

もう一軒お隣は下駄屋でこの叔父さん叔母さんは殊のほか優しくかわいがって下さって学校から帰ると決まって遊びに出掛けたものだった。鼻緒のすげ方も見よう見真似できっちり覚えていた。人形芝居の一座を持っておられた叔父さんは、時折澄ました面持ちで笑わせてくれたり、自分の子のように接して下さった。

そのお隣は高級料理店で母の同級生、何かの集まりにはおいしい仕出しを頂くのが楽しみで、中でもブリのつけ焼きは天下一品であった。

小路を挟んだ荒物屋は父方の伯母の家でいつもおいしい料理の匂いが道行く人をうらやまし

母郷礼賛

がらせていた。続いて呉服店・花屋・金物屋・印舗屋と延々と軒を並べている。

四ツ辻の角の魚屋へは父の好みの刺身を毎日のように買いに行かされていたので、鱗のふき方、魚の捌き方はじつと観察していたお陰で後日の生活にどれ程役に立ったか分からない。結婚したばかりの頃、祖父から「孫の嫁さんは刺身がすっぱりできるんじゃ」と碁を打ちながら階下まで自慢声が聞こえていたのも魚屋で覚えたうれしい成果だった。

昔の商店街の一軒一軒がどれ程の商いをしていたかは別問題として、私の少女期には人情豊かな小宇宙であった。

バス通りといえども砂利道街道の砂塵被害には往生した。夏は家の前を流れている川から柄長柄杓で水をくみ道路へまくのも子供の仕事であった。水を柄杓に入れるにも要領が必要で子供ながらどうすればこぼさず道路まで水を持ち上げることができると真剣に考えたものだ。

私の今在るは、子供の頃のご近所との関わりの中で、自分の今できる事をよく見て覚え、考えることの習慣が、優しい大人達によって育んでいたお陰だと今頃になって母郷賛歌を綴った次第である。(船越淑子)

カンガルー跳びつつ待つはクリスマス

世界一危険なキック火食鳥

三頭の大口きりん小春暮れ

めいめいの檻透けてゆく砥部おろし

内股のマンドリルさあおやつです

抱き合ふて手の余りたるニホンザル

母の背のやはり特等黒狸々くろしやうじや

ライオンと呼ばれ冬晴れ背ナに負ふ

ちなみに、鼻は象、目はサイ、体は熊、足は虎、尾は牛……それは『猿』。彼を一目見るだけでも千金の値うち。悪夢にさいなまれる方は一度訪ねては？

トピックス

竹内菊世さん、三輪和さん、連句部門で最優秀賞 13日発表され

た第15回とくしま文学賞（県、県立文学書道館主催）で栄冠を獲得された。受賞作は、蜚蜉「木椅子」の巻。応募45点の中から選ばれた。選者の東條士郎氏は『木椅子』は蜚蜉という形式。28宿のバリエーションであるが、一連を3句あるいは4句に細分したところに付けと転じという連句の本質を意識した工夫が見られる」と評している。この連句は竹内、三輪さんともう一人の3人による作品。三輪さんは、北島町のほかの3人との作品、歌仙「直線と直角」の巻、でも佳作に入った。

竹内菊世さんの受賞祝賀パーティー とくしま芸術文化賞、県民賞の受賞を祝って、7月17日阿波観光ホテルであった。ペンクラブの会長だけでなく、同人誌「飛行船」の主宰、「阿波の歴史を小説にする会」の会長など、幅広く活躍されているだけに、各界各層から84人が駆けつけ、菊世さんの受賞を喜び合った。

木村義次・喜美子ご夫妻のプラチナ婚祝賀パーティー 結婚70年を迎えた義次（99）、喜美子（95） 夫妻を祝う会（写真）が、9月9



広い園内をゆったり見学



日、ホテル・クレメントであり、ペンクラブ会員ら関係者、木村ファミリー約70人が出席。

有名連の殿様連が賛助出演するなど、にぎやかに盛大にお二人の長寿を寿いだ。最後に、義次さんが力強くお礼の言葉を述べた。



渡辺恵子さん 第27回永井隆平和賞で最優秀賞 9月10日、島根県雲南市で開催された同賞の一般部門で受賞。同市出身で、白血病の身で世界に平和を訴え続けた永井博士の精神を受け継ぎ、「愛」と「平和」をテーマに作文・小論文を募集。米国を含む26都道府県から1465点の応募があった。授賞式典では、5部門の最優秀者による作品の朗読もあった。渡辺さんは「出席し、朗読をさせていただき、感慨深い一日となりました」と話している。

中四国詩人会徳島大会 9月30日、阿波観光ホテルに中、四国各地から約80人が参加して開催。徳島現代詩協会の山本泰生会長（ペンクラブ会員）が歓迎のあいさつ。中四国詩人賞の表彰、各県代表による詩の朗読などがあり、最後に藤本ひかりさん（詩人・野上彰の長女）写真



ひかりさん（詩人・野上彰の長女）写真



が「父・野上彰の詩と人生」と題して記念講演。父親への思慕と数々のエピソードは実に興味深く、時の経つのも忘れるひと時だった。



岡本信子さんら7人が入賞 阿波の歴史を小説にする会（竹内菊世会長）主催の「阿波の地名の物語」読書感想文の朗読会を兼ねた表彰式（写真）が10月8日、県立文学書道館で、来賓の飯原一夫・徳島文理大学名誉教授ら、審査員の高橋啓・鳴門教育大学名誉教授ら関係者40人が出席して開かれた。ペンクラブ会員の入賞者は次の皆さん。

優秀賞 岡本信子、高木純▽準優秀賞 山口久雄▽入選 正木孝枝、渡辺恵子▽

佳作 正木孝枝、増田裕子、山形靖子

没後50年「アカシア忌」 郷土の生んだ詩人・野上彰が亡くなって50年となる命日の11月4日、野上の長女、藤本ひかりさん（写真）も東京から駆けつけ、新町橋南詰めの文学碑や周辺の清掃、詩碑への献花・献杯・献歌、その後会場をシビックセンター（写真）に移して朗読と歌のコンサートなどで、在りし日の野上に思いをいたした。「野上彰の会」（竹内菊世会長）主催で、ペンクラブ会員も多数参加した。



箱まわし20年の歩み紹介企画展 生みの親であり、育ての親である辻本一英さんが、現在顧問を務める「阿波木偶箱まわし保存会」



が、11月22・23の両日、徳島市シビックセンターで開いた。会場（写真）には、海外公演を含むこれまでの多彩な活動の様子をパネル展示。国の登録有形民俗文化財となった箱や面などの門付け道具、人形師初代天狗久らの人形と頭約90点も並ぶ。徳島の箱廻しの歴史を辻本さんが解説。人形遣いの新たな可能性を探る箱廻しとフルート演奏とのコラボなどもあり、各日2回の公演は立ち見も出る盛況ぶり。このイベントは、今年のサントリー地域文化賞の受賞を記念して開催された。

会員短信

★丁山俊彦さん 氏が理事長を務めるNPO法人モラエス会が、このほど「モラエス読本」（B5判、209ページ）を刊行した。ポルトガルの文人モラエス（1854～1929年）についての膨大な著作や資料、写真、伝記などの分析を通して、その生涯と作品の魅力に迫る内容。税込み1000円。紀伊國屋書店徳島店で販売している。

2月18日 阿波観で研修会 講演やペンクラブ賞の表彰

ペンクラブ賞の表彰式を兼ねた恒例の研修会は2月18日（日）午前10時30分から阿波観光ホテルで開催される。12月の理事役員会で決まった。「選集」35号の作品を対象にしたペンクラブ賞の発表と表彰、会員による講評、この後徳島科学史研究会代表、西條敏美氏

の講演がある。午後は会食をしながらの懇親会（会費3000円）。出欠は同封のはがきで安曇統太氏まで。（090-8692-9613）

投票、お急ぎください！

10月発行の「選集」PART35の一般作品（短詩形はのぞく）を対象にしたペンクラブ賞の投票は、締め切りを12月末としていましたが、10日間延長して1月10日としました。より多くの方に投票していただくためです。投票用紙も再度同封しました。まだ投票されていない方はぜひお願いいたします。

「選集」「通信」

編集体制を一新

委員会組織立ち上げ
上窪副会長以下6人で編成



上窪委員長

ペンクラブの「選集」「通信」の編集体制が一新した。これまで9年間担当してきた田上がこの「通信」178号をもって退任。代わって編集委員会組織を立ち上げ、新年からスタートすることになった。12月2日の理事役員会で決まった。

新しくできた編集委員会の顔ぶれは、委員長に上窪則子副会長、委員に高木純、竹内紘子、関真由子の3人の理事、さらに顧問に山俊彦副会長、アドバイザーに東根泰章理事の6人体制。上窪委員会は「この度、選集及び通信の編集を担うこととなりました。青天の霹靂とはまさにこのことかと戦々恐々しながらも、委員一同団結し真摯に努めて参りたいと思います。皆様のご協力ご支援のほどよろしくお願い申し上げます」と話している。

新しく誕生した編集委員会の初会合は、新年1月11日、午後3時から丁字堂で開かれる。

編集体制とは別に、10〜12月の理事役員会で、一部役員の異動があった。長年副会長を務められた蔭山美紗子さんが辞任し、参与に。新しく東根泰章、関真由子のお二人が理事に。事務局に新しく渡辺恵子さんが加わり、桂事務局長以下4人体制となった。

お知らせ

ペンクラブの前会長・故山下博之氏夫人の光子様からこのほど、「50周年のお祝いに」と、5万円をペンクラブに寄贈していただきました。11月7日、竹内会長と田上の両名でご自宅にお邪魔し、光子夫人にお礼を申し上げてきました。光子夫人はともお元気そうでした。

訂正

ペンクラブ選集PART35の357ページ、県内文学碑の紹介コーナーで、見出し「室井其角の句碑」とあるのは「宝井其角の句碑」の誤りでした。訂正します。

編集後記

この「通信」178号をもって私のペンクラブでの編集担当を下ろしていただくことになった。

長年ご助言、ご協力をいただいた会員皆さまにまずもお礼を申し上げます。ありがとうございます。11月の定例理事役員会で新スタッフも決まった。来年からはさん新で生まれ変わった「選集」「通信」に変身してくれることを期待している。私事になるが、私にとって雑誌の編集は新聞社退職時のあこがれだった。やりたいこととのいの一歩だった。それが実現、60歳代は県の情報誌、そして70歳代はペンクラブと、新聞記者時代の経験を少しは生かすことができただけではないかと喜んでいる。そして迎えた80歳代。何をするか。旅行に読書、3冊目の本の出版。自分自身のための活動に残された時間を使いたいと今、よこしまなことを考えている。

（田上 倉平）